

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

5. 広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5479

概観

はじめに、特記すべき事項として、本館は、2013年9月に1977年の開館以来1000万人目の来館者を迎え、記念式典を挙行了。その様子は、全国紙やNHKをはじめ多くのメディアで報道され、改めて本館の活動が広く紹介されることとなった。

第2に、インターネットによる広報活動については、新たに、近年急速に利用者を伸ばしているソーシャルメディアの運用を開始した。FacebookおよびTwitterの公式アカウントを開設し、若年層を中心として幅広い利用者に研究・博物館活動を情報発信するとともに、本館および文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供した（Facebook いいね！数 3,042、Twitter フォロワー数 3,994）。さらに、世界最大の動画共有サービスYouTubeに公式チャンネルを開設した。展示の紹介映像や研究者が制作した民族誌映画を掲載し、世界に向けて研究・博物館活動の成果を公開した（総再生回数 3,199）。これらは、今後有効な広報手段になると考える。第1に、マスメディア等を通さずに本館が利用者に直接、即時的に広報できること、第2に、本館に関心のある利用者のコミュニティが生まれ、そのつながりから情報が広く拡散すること、第3に、広告費用がほとんどかからないことが主な理由である。今後、運用を安定的に継続して、これを定着させるとともに、提供するコンテンツの魅力を高めたい。

急増しているスマートフォン利用者への対応としては、ペーパーレスのスマートフォン用観覧券を試験的に販売したところ、利用者から好評を得たが、試験期間が短期間であったことから、来年度も再度試験的に販売しつつ、来年度中の本格実施を検討する。また、特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」のスマートフォン用ウェブアプリを館内で開発し、特別展の魅力を解説するとともに特別展示館への来館を促した。一方で、携帯サイトは利用者数の減少により、今年度末をもって廃止することとした。ホームページに関しては、トップページを中心にリニューアルを施し、トップページから目的のページへ直接アクセスできるよう利便性を高めたほか、「お知らせ」「イベント情報」をトップページに掲載し、情報のアクセシビリティおよび発信力を高めた（訪問者数 603,604、ページビュー数 2,226,783）。メールマガジン「みんぱく e-news」に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は54,477件）。

第3に、マスメディアによる広報活動については、MBS アナウンサーの河田直也氏と池谷和信本館教授によるトークイベント「みんぱく×MBS presents 行って！わかった！これがびっくりリアル世界だ。」を開催した（参加者数 316名）。本イベントは、ラジオ番組およびテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や研究公演のラジオCMを流したりして、マスメディアの発信力を利用し、本館に興味を持つ層の裾野を広げた。また、毎日小学生新聞で毎週土曜日に「みんぱく世界の旅」を新連載し、教員がそれぞれの研究内容を小学生向けにわかりやすく解説した。毎日新聞連載の「旅・いろいろ地球人」や千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やあ、みんな）」も継続している。プレスリリースの方法に関しても見直し、本館ウェブサイト上に新たに報道関係者向けページを開設し、報道関係者のアクセスを向上させるとともに情報提供を迅速化した。報道関係者との懇談会も年14回（うち内覧会4回）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した（参加者数106名）。

第4に、学校教育・社会教育活動については、大学教育への貢献として、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続し、高等教育への活用を推進した。2013年度は、継続申し込み4件（大阪大学、京都文教学園、同志社大学文化情報学部文化情報学研究科、千里金蘭大学）があり、1,685人の学生や教職員が来館した。中でも、大阪大学については、同学の全学ディスプレイ装置で本館紹介映像を常時上映し、本館利用を促すことができた。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学のためのみんぱく活用マニュアル」の配布を継続し、68回47大学、2,139名の大学関係者が展示場を利用した。初等・中等教育への貢献としては、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校5校14名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを2回実施し、53団体157名の参加があった。社会人を対象とした生涯教育への貢献としては、新たに、園田学園女子大学総合生涯学習センターのシニア専修コースにおいて「園田・民博連携講座」を開講し、本館教員6名が講座を担当した。大阪府高齢者大学校においては、引き続き本館教員30名が1年間を通して授業を行った。

第5に、研究成果の社会還元および教育普及活動については、継続して、「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,518名）、「みんぱく映画会」（みんぱくワールドシネマ含む）を10回（参加者数 2,761名）、「研究公演」を3回（参加者数 1,355名）、「みんぱくウィークエンド・サロン——研究者と話そう」を45回実施した（参加者数 1,635名）。特に、展示関連では、新構築した日本の文化「祭りと芸能」「日々の暮らし」展示を広く社会へ紹介するため「世界のニッポン、みんぱくのニッポン！夏～秋のみんぱくフォーラム2013」と題して、体験プログラム「贅女文化

にさわる」や展示場クイズ「みんなQ」等を実施した。機関研究関連では、「包摂と自律の人間学」のテーマに沿って、上映会「みんなくワールドシネマ」を開催した。これらの活動は、広報誌『月刊みんなく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすることを通じて、広く情報発信した。さらに、視覚障がい者向けの音訳版も並行して製作・配付した。

第6に、地域に根ざした広報活動については、第1回となる、北大阪7市3町の美術館・博物館計51館による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加および会場提供した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2013に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、地元に向けた広報活動を展開した。

第7に、本館のブランド認知のための活動については、広報物等に使用する本館シンボルマークおよびロゴタイプの組み合わせパターンを作成し、規程にまとめた。これにより、デザイン面において統一的なシンボルマーク等の使用が可能となり、本館のブランド認知のさらなる向上が期待できる。また、オリジナルグッズとして、新たにチケットホルダーおよび紙袋を製作した。イラストは、ファッションブランドの紙袋やTシャツのデザイン等を手がけるBoojil氏に依頼し、従来とは一線を画す陽気で楽しいグッズに仕上がった。来客やシンポジウム等の参加者へ広く配布し、利用してもらうことでブランド認知および広報効果を高めていきたい。

最後に、2013年度の広報の課題として、広報戦略の策定が不十分だったことが挙げられる。来年度は、広報の理念と方針をたて、それに基づいて、広報戦略を考える。広報の対象については、国際、国内、地域に分類・整理し、それぞれに適した広報手段を用いる。

国立民族学博物館要覧2013

- ・和文要覧 2013年6月発行
- ・英文要覧 2013年12月発行

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/> (2014年3月31日現在)

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2013年度の訪問件数は603,604件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

常設展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんなくe-news」を発行し、海外調査からの帰国報告「World Watching」や毎月開催している「みんなくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんなく映画会」「特別展」などのお知らせを、月1回電子メールで配信している。2013年度の配信数は54,477部。

報道

●報道関係者との懇談会

2013年4月18日 8名(7社) 企画展『アリラン——The Soul of Korea』、企画展『アマゾンの生き物文

		化』、みんなく映画会『文化とはなにか——マダガスカルの生活文化、マダガスカルの音楽文化』、大阪府からの時代玩具コレクションの譲渡について、ほか
5月1日	8名(6社)	企画展『アリラン——The Soul of Korea』報道・出版関係者向け内覧
5月23日	8名(6社)	ワークショップ『アラビアンナイトと北アフリカの物語』、みんなく映画会『文化の記録と映像』、音楽の祭日2013 in みんなく、facebook・報道関係者向けページ開始のお知らせ、企画展『アマゾンの生き物文化』の展示ツアー、ほか
6月13日	6名(6社)	日本展示学会 学会賞受賞、企画展『武器をアートに——モザンビークにおける平和構築』、ワールドシネマ『さあ帰ろう、ペダルをこいで』、博学連携教員研修ワークショップ『学校と博物館でつくる 国際理解教育——センセイもつくる・あそぶ・おどる・たのしむ』、ほか
7月18日	11名(9社)	特別展『渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』、企画展『台湾平埔族の歴史と文化』、お知らせ『1000万人キャンペーン』、研究公演『のど歌のふるさと』、映画会『再会の食卓』ほか
9月12日	2名(2社)	企画展『台湾平埔族の歴史と文化』開幕式・懇談会
9月18日	11名(10社)	特別展『渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum』報道・出版関係者向け内覧
10月11日	9名(7社)	佐々木高明先生追悼シンポジウム『日本文化のしくみ——その多様性を考える』、公開講演会『ミャンマー 刻んだ歴史 未来へのまなざし』、研究公演『共振する大地のリズム——ブルキナファソ・カバコと佐渡・春日鬼組の競演』、研究公演『雄勝法印神楽みんなく公演』、ほか
11月21日	3名(3社)	年末年始展示イベント『うま』、「twitter」開始のお知らせ、河合助教新人教員挨拶、カムイノミへ移動
12月19日	6名(4社)	国際シンポジウム『北太平洋沿岸諸文化の比較研究——先住権と海洋資源の利用を中心に』、公開フォーラム『古代文明の生成と経済的基盤-西アジアとアンデス』、ワールドシネマ『ラビット・ホール』、えと展『うま』展示ツアー、ほか
2014年1月16日	9名(8社)	研究成果公開プログラム『個人・家族・国家のゆくえ——文化人類学と人口学からの学際的アプローチ』、特別展『イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる』、国際シンポジウム『社会運動と知の生産——東アジアにおける政治・アイデンティティ・社会変化』、ほか
2月20日	9名(7社)	お知らせ「多機能資料保管庫」、公開シンポジウム『災害と展示』、公開講演会『働き者と、ナマケモノ！？——「はたらきかた」文化論』、定年退職記念講演会、公開シンポジウム『伝統と創意——台湾原住民工芸の現在』、ほか
3月20日	9名(7社)	お知らせ「金沢大学との学術協定」、春のワークショップ『世界一周ビーズの旅 フィールドワークに挑戦！』、お知らせ『あべのハルカス近鉄本店講座シリーズ』、みんなくフォーラム2014、東アジア展示 展示ツアー、ほか

●新聞等報道件数

2013年度は、テレビ25件、ミニコミ125件、ラジオ62件、雑誌63件、新聞701件、他12件、計988件の報道があった。

月刊みんなく

4月号	(第427号)	(2013年4月1日発行)	特集「だまし、だまされ」
5月号	(第428号)	(2013年5月1日発行)	特集「日本の文化」
6月号	(第429号)	(2013年6月1日発行)	特集「食べない食べもの、食べられない食べもの」
7月号	(第430号)	(2013年7月1日発行)	特集「共生の雨林 アマゾン」
8月号	(第431号)	(2013年8月1日発行)	特集「ハイブリッドか ちゃんぽんか」

9月号	(第432号)	(2013年9月1日発行)	特集「美麗島——台湾」
10月号	(第433号)	(2013年10月1日発行)	特集「武器をアートに」
11月号	(第434号)	(2013年11月1日発行)	特集「洪沢敬三と屋根裏部屋の仲間たち」
12月号	(第435号)	(2013年12月1日発行)	特集「稲作以後」
1月号	(第436号)	(2014年1月1日発行)	特集「馬」
2月号	(第437号)	(2014年2月1日発行)	特集「イメージの力」
3月号	(第438号)	(2014年3月1日発行)	特集「夢か、うつつか」

みんなくゼミナール

第419回 マダガスカル 霧の森のものづくり【特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」関連】

2013年4月20日

講師 飯田 卓

受講者 202名

内容 身近な森から伐りだした木の家、その窓にほどこす幾何学的な木彫り、植物繊維から編みだされるさまざまな意匠。マダガスカル山間部の暮らしに息づいてきたものづくりは、こんにち国際的な評価を受けるようになった。次世代に受け継ぐべきものは何か、われわれができる支援は何かを考えた。

第420回 マダガスカル 霧の森にくらす人びと【特別展「マダガスカル 霧の森の暮らし」関連】

2013年5月18日

講師 内堀基光（放送大学）

聞き手：飯田 卓

受講者 193名

内容 日本のマスメディアからは「秘境」と呼ばれるマダガスカル森。そこにくらすザフィマニリの人たちは、山々によって外の世界からきり離され、自然のリズムにあわせて生活をいとなんできたようにみえる。しかし、彼らの知識がユネスコ無形文化遺産に指定されていることからわかるように、静けさはくらしの一面にしかすぎない。未来をみすえつつ、霧の森の現在をお話した。

第421回 日本の漁業を考える【新日本の文化展示関連】

2013年6月15日

講師 日高真吾

川島秀一（東北大学）

受講者 140名

内容 日本の文化展示場は、このたび新しく生まれ変わった。このなかで、「日々の暮らし」では、里、海、山で営まれる暮らしを展示している。このゼミナールでは、漁業に注目し、日本の漁業の将来について考えた。

第422回 色を創る、音で伝える、心に触れる——瞽女がみた風景【新日本の文化展示関連】

2013年7月20日

講師 廣瀬浩二郎

受講者 291名

内容 瞽女とは、三味線を携え全国各地を旅した盲目の女性芸能者である。21世紀の今日、瞽女は消滅し、その存在を知る人も少なくなった。視覚優位の現代社会にあって、瞽女文化はどんな意味を持つのであろうか。瞽女唄の録音資料を紹介しつつ、色・音・心をキーワードに、瞽女文化の可能性を考えた。

第423回 つくりもの——ハレのかたち・おもしろいかたち【新日本の文化展示関連】

2013年8月17日

講師 笹原亮二

西岡陽子（大阪芸術大学）

福原敏男（武蔵大学）

受講者 166名

内 容 祭りや年中行事などのハレの機会に、様々な趣向を凝らした造形物を見物に供する「つくりもの」が、西日本を中心に各地で見られる。各地では、人びとはおもしろいかたちを作ることを競い合い、それを楽しみに大勢の人びとが見物に集まってくる。そんなつくりものの魅力について考えた。

第424回 屋根裏部屋博物館主人の横顔【特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」関連】

2013年9月21日

講 師 飯田 卓

木村裕樹（龍谷大学）

永井美穂（渋沢資料館）

受講者 238名

内 容 少年時代に友人たちといっしょにコレクションを持ち寄り、馬車庫の屋根裏で博物館ごっこをしていたのが渋沢敬三であった。生物学者になるのが夢であった。長じてからは邸内に本格的な博物館兼研究所を建て、若い研究者たちの育成にも心を砕いた渋沢の一面についてお話しした。

第425回 心の武装解除——モザンビーク「武器をアートに」プロジェクトを考える【企画展「武器をアートに——モザンビークにおける平和構築」関連】

2013年10月19日

講 師 吉田憲司

受講者 155名

内 容 アフリカのモザンビークでは、内戦終結後も大量の武器が民間に残された。その武器を農具や自転車と交換して回収し、武装解除をはかるとともに、回収した武器を素材にアートの作品を生み出して、平和を人びとの心に定着させようというプロジェクトが進められている。そのプロジェクト「銃を鋤に」の意義を考えた。

第426回 台湾平埔族の歴史と文化【企画展「台湾平埔族の歴史と文化」関連】

2013年11月16日

講 師 野林厚志

受講者 243名

内 容 台湾において、早くから漢族の影響を強く受け、慣習、言語、物質文化が大きく変化していった平埔族の人びとは、近年、歴史史料や博物館資料を手がかりに自分たちの歴史を見つめなおし、民族アイデンティティを再興させている。今回のゼミナールでは平埔族の歴史と文化を紹介し、エスニシティが再生される過程を考えた。

第427回 カザフの死者儀礼——日常から展望するイスラーム

2013年12月21日

講 師 藤本透子

受講者 168名

内 容 死者のためにクルアーン（コーラン）を唱え、盛大な肉料理でお客をもてなし、馬上競技に熱くなる。カザフ人にとってのイスラーム（イスラム教）は、私たちが想像するイスラームとは少し異なる。マスメディアで「厳格」「過激」というイメージが先行しがちなイスラームについて、カザフスタンの草原に暮らす人びとの日常から考えた。

第428回 熱狂エチオジャズ！！！！

2014年1月18日

講 師 川瀬 慈

受講者 305名

内 容 エチオピアでは、1950年代から1970年代にかけて、皇帝ハイレセラシエの護衛楽団がエチオピア特有のメロディと西洋のポピュラー音楽を絶妙にブレンドさせながら独自の音楽世界を発展させた。本ゼミナールでは、現在各国の音楽シーンで話題沸騰の“エチオジャズ”の歴史とその世界的な広がり、音楽家

たちの素顔を紹介した。

第429回 ベトナムの黒タイのうた、おはなし

2014年2月15日

講師 榎永真佐夫

受講者 195名

内容 山がちなベトナム西北地方には、たくさんの民族が高度に応じてすみわけている。そのうち黒タイという人びとは、盆地に水田をひらいてくらしている。かれらが村で伝えてきた歌やお話を紹介し、かれらが自分たちのくらしをどのようにイメージしているのか、村のくらしの現状にふれながらお話した。

第430回 装いのセンスと伝承——中国のフィールドから

2014年3月15日

講師 横山廣子

受講者 222名

内容 中国雲南省では、さまざまな民族衣装を目にする。日常的に着る人びとは減少しているが、民族衣装は大切にされている。変化しつつ伝承され、洗練されてきた装いのセンスが、色合い、形、装飾、そして何より着方にあらわれる。それを紹介し、伝承がどのようにおこなわれるのかも考えてみた。

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

第294回 2013年4月7日 ザフィマニリの編みもの

講師 上羽陽子

参加人数 34人

内容 マダガスカル中央高地に居住するザフィマニリの編みものを紹介した。身近に生えている植物繊維を使って、女性たちは家事や育児の合間に、敷物やカゴ、帽子などの日用品を編みあげる。展示をみながら、繊維利用の可能性や、かれらのくらしについて考えてみた。

第295回 2013年4月14日 マダガスカルにおける狩猟採集民のくらし

講師 池谷和信

参加人数 29人

内容 マダガスカルの南西部には、地表水を得ることが難しいミケアの森がある。ここでくらす森の民ミケアが、どのように水を入手して何を食べているのか、その生存の秘密を紹介した。

第296回 2013年4月21日 マダガスカルの言語文化のルーツと変化

講師 崎山 理（本館名誉教授）

参加人数 40人

内容 マダガスカルの言語と文化は元になったインドネシアの故地や渡来の時期がほぼ判明しているので再編成と統合に興味深い変遷が見られる。新たな環境に適合して形成されたマダガスカルの言語文化のユニークな特色を話した。

第297回 2013年4月28日 マダガスカルの織機と織物

講師 吉本 忍

参加人数 56人

内容 マダガスカルでは、インドネシアから人の移動にともなってもたらされたと考えられる腰機による織りの技術が、最近までザフィマニリの人たちのあいだで継承されてきた。その経緯とともに、今日、急速に失われつつある手仕事にかかわる危機的状況についてお話した。

第298回 2013年5月12日 マダガスカルの無形文化遺産ザフィマニリ彫刻の映像記録

講師 川瀬 慈

参加人数 21人

内 容 マダガスカル中央高地のザフィマニリの人々の生活とものづくりを対象にした映像記録のアプローチについて、映像を交えながら、紹介した。

第299回 2013年5月19日 マダガスカル農村部の日常生活と墓制

講 師 森山 工（東京大学）

参加人数 25人

内 容 マダガスカルは地理的にはアフリカ大陸に近いが、文化的には東南アジア島嶼部と強いつながりをもっている。アジア的な稲作が生業の基盤をなしており、祖先祭祀にもアジア的な要素が見られる。マダガスカル随一の稲作地帯における人々の日常と、墓や祖先との関係についてお話しした。

第300回 2013年5月26日 マダガスカル展 もうひとつの準備現場

講 師 飯田 卓

参加人数 50人

内 容 特別展を準備するうえでは、展示場での作業のほか、対象地域の事前調査が欠かせない。今回は展示デザイナーや民族芸術学者、映像人類学者、森林生態学者らとともに現地を調査し、展示コンセプトを固めた。チームによる展示づくりのプロセスを紹介した。

第301回 2013年6月2日 シルクの島マダガスカル

講 師 杉本星子（京都文教大学）

参加人数 45人

内 容 マダガスカルの人々は、古くから森に生息する蛾の繭から糸をとり、布を織ってきた。ランディベと総称される野蚕種は島の固有種である。また、19世紀に家蚕が導入され、中央高地北部には今なお養蚕地帯が広がっている。マダガスカルの伝統的なシルク織物についてお話しした。

第302回 2013年6月9日 太平洋からきたマダガスカルのことば

講 師 菊澤律子

参加人数 88人

内 容 現在マダガスカルで話されていることばは、古くはインド洋を超えてインドネシアのボルネオ島からきたと考えられている。どうしてそのようなことがわかるのか、ことばに関する楽しいエピソードを交えながら紹介した。

第303回 2013年6月16日 瞽女文化と現代——盲目の旅芸人の実像

講 師 廣瀬浩二郎

参加人数 55人

内 容 バリアフリーとは、単なる障壁除去ではない。互いの違いを認識・尊重し、バリアのあちらとこちらを自由に行き来するのが真のバリアフリーである。「柔軟性」「能動性」をキーワードとして、瞽女と地域住民の交流の意義をバリアフリーの観点から解説した。

第304回 2013年6月23日 日本の文化展示場「日々の暮らし」を考える

講 師 日高真吾

参加人数 31人

内 容 新しく生まれ変わった日本の文化展示場のうち、今回は、「日々の暮らし」のセクションを紹介した。時代の流れとともに変容しつつある日本人の暮らしのなかにあっても、変わることはない日常生活の諸相について、里、海、町、山の生活から考えた。

第305回 2013年7月7日 新しいハレのかたち

講 師 笹原亮二

参加人数 27人

内 容 3月にあらたにオープンした日本展示場の「祭りと芸能」のコーナーには、造形に趣向を凝らしたつくりものや笠をはじめ、これまでには展示されていなかったハレの造形物がお目見えした。そうした

あらたな展示資料を中心に、展示場のハレのかたちが祭りや芸能の現場でどのように用いられているかを紹介した。

第306回 2013年7月14日 アマゾンの生き物文化

講師 池谷和信

参加人数 75人

内容 アマゾンには世界最大の熱帯林が広がり、豊かな生き物文化が育まれてきた。インコやワシの羽を使った頭飾り、サルやペッカリーの歯の首飾りなどなど。そして、これらの動物は、「ペット」としても人々に愛されている。野生を飼い慣らすことのできるアマゾンの人たちの世界を体験した。

第307回 2013年7月21日 ボリビア・アマゾンの暮らし

講師 齋藤 晃

参加人数 45人

内容 南米大陸の中央に位置するボリビアは、アンデス高地の国として知られているが、実際には国土の6割が低地で、その大部分がアマゾン川流域である。このボリビア・アマゾンにおける人びとの暮らしを、わたし自身の体験を交えながら紹介した。

第308回 2013年7月28日 平和を築くアート——企画展「武器をアートに」によせて

講師 吉田憲司

参加人数 35人

内容 アフリカのモザンビークでは、内戦終結後も大量に民間に残された武器を農具などと交換して武装解除を進め、その回収した武器でアートの作品を作り出すという事業が進んでいる。その事業を通じて制作された作品が、先ごろ本館に収められた。アートを通じて平和を築く営みを紹介した。

第309回 2013年8月4日 家系図でつながる人びと

講師 韓 敏

参加人数 35人

内容 中国では、古く父系の家系を記録する「族譜」をつくる風習がある。族譜は一族の由来、その後の系譜関係、墓地、移住先、男性の生死の日時、学歴・官職、妻子などと一族のさまざまな歴史を記してきた。人びとは、なぜ族譜を作るのか？一緒に考えてみた。

第310回 2013年8月11日 「梅棹忠夫著作目録（1934～）データベース」公開について

講師 山本泰則

参加人数 12人

内容 梅棹忠夫著作目録は、本館の初代館長梅棹先生の著書・論文から本の帯の推薦文に至るまで、ありとあらゆる著作のリストである。本館に移行して昨年12月に公開したこのデータベースについて、その楽しみ方を梅棹著作目録の変遷をまじえながらお話した。

第311回 2013年8月18日 ガーナの病気と医療

講師 浜田明範

参加人数 33人

内容 ガーナの人々は私たちとは少し違う病気に多く罹っているが、私たちと同じように抗生物質や解熱剤を用いて病気に対処している。人々はどうのように病気に対処し、医療はどのような状況にあるのか。アフリカの現状を通じて病気と医療について考える。

第312回 2013年8月25日 米国先住民ホピのソーシャルダンス

講師 伊藤敦規

参加人数 14人

内容 米国南西部の先住民ホピは、様々な仮面儀礼を行う。また、ソーシャルダンスと呼ばれる仮面を付けない儀礼も実施されている。2012年3月に本館で開催した研究公演「ホピの踊りと音楽」の映像記録

を用いながら、そこで披露された踊りを解説した。

第313回 2013年9月1日 アトランティック・ヒストリーと西アフリカ

講 師 竹沢尚一郎

参加人数 28人

内 容 世界史の新しい発想に、大西洋を取り巻くヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカの歴史を統一的に理解しようとするアトランティック・ヒストリーがある。アフリカ大陸の諸社会は、この歴史にかかわることによってどのように世界史に登場したのか、を考えた。

第314回 2013年9月22日 アチックミュージアムの民具コレクション

講 師 木村裕樹（龍谷大学）

参加人数 38人

内 容 アチックミュージアムのコレクションには収集者の個性があふれている。なかでもアチックの中心的人物の1人で山の民俗研究のバイオニア的存在であった、高橋文太郎の収集した民具に焦点をあて、研究の足跡をたどった。

第315回 2013年9月29日 みんなの「磁力」を考える——音楽の祭日を事例に

講 師 出口正之

参加人数 17人

内 容 博物館の機能は、能動的にモノを集め、展示していく方向性だけを持ったものだけなのであるか？それとは逆に、博物館に集積する力によって、外のものを引き寄せることもあるのではないだろうか？「音楽の祭日」というイベントを事例に、博物館が持つ、引き寄せる力、みんなの「磁力」というものを皆さんとともに考えた。

第316回 2013年10月6日 インドの婚礼のいま

講 師 三尾 稔

参加人数 41人

内 容 盛大なことで知られるインドの婚礼は、経済発展を背景にますます華麗に行われるようになっている。婚礼にうつしだされるインド社会の現在の姿はどのようなものであろうか。また婚礼にかける人びとの思いはどうであらうか。最新の映像取材の一端をお見せしながら、考えた。

第317回 2013年10月13日 台湾民族事情

講 師 野林厚志

参加人数 46人

内 容 台湾の民族は漢族と原住民族とにおおきくわかれ、漢族は先祖の出身地や台湾に移住してきた時期によって、原住民族は言葉や慣習によって、さらに細分化される。民主化が進んだ80年代以降、それぞれのエスニシティが複雑にからみあう民族事情を紹介した。

第318回 2013年10月20日 東南アジアのゴング文化

講 師 福岡正太

参加人数 17人

内 容 インドネシアは、東南アジアの文化を特徴付ける楽器であるゴング製作の中心地の1つである。近年、楽器商の勃興とともに、インドネシアにおけるゴングの製作や流通のパターンに変化が見られている。変化しつつある東南アジアのゴング文化の一端を紹介した。

第319回 2013年10月27日 笑い話を分析する——関西の女性の面白さとは

講 師 金田純平

参加人数 30人

内 容 関西地方の方言は「お笑い」の言語として広く知れわたるようになった。しかし、それはプロの芸人に限った話ではなく、一般の人でもまた笑いを志向する話し方のワザを持っている。関西在住の女性の

笑い話を観察し、どのように笑いを生むのかについて一緒に考えてみた。

第320回 2013年11月10日 それでも豚を食べる人びと——パレスチナ・イスラエルにおける豚肉食

講師 菅瀬晶子

参加人数 20人

内容 中東で生まれた一神教のうち2つ、ユダヤ教とイスラームで禁忌とされる豚肉食。このため長らく、豚肉を食べるのは一部のキリスト教徒のみであった。ところが近年、パレスチナ・イスラエルでは豚肉を商うどころか、みずから食すキリスト教徒やムスリムが増えている。その理由を探ってみた。

第321回 2013年11月24日 アイヌの工芸について

講師 齋藤玲子

参加人数 29人

内容 アイヌの民具は機能的であるとともに、手のこんだ文様が施されたものも多くある。アチックミューゼウムなどの所蔵品のなかにも、美的にすぐれた生活用具が含まれている。こうした古い資料を活かした、近年の工芸に関する取り組みについてお話した。

第322回 2013年12月1日 タイで働くということ

講師 平井京之介

参加人数 29人

現代社会では、多様な価値観や文化が混ざり合う環境で働く機会が増えている。そうした機会にどんなことを注意すればよいのだろうか。タイの日系企業で調査した経験をもとにして、異文化間コミュニケーションに大切なことを考えてみた。

第323回 2013年12月8日 ボリビアのカカオ・フェスティバルから「世界」を見る

講師 鈴木 紀

参加人数 20人

内容 南米ボリビアのカカオ生産者組合エル・セイボが、4年に1度開催する「カカオ・フェスティバル」の様子を紹介した。見物は農民たちが工夫を凝らして演じる踊りである。さまざまな民族舞踊を見ながら、世界経済の中で同組合がたどってきた足跡についてもお話した。

第324回 2013年12月15日 アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨

講師 岸上伸啓

参加人数 24人

内容 アラスカ北西地域沿岸の先住民イヌピアットは、紀元10世紀頃から捕鯨を行っている。北極海に面するバロー村では、現在でも春と秋にホッキョククジラ猟に従事し、捕鯨祭を行っている。彼らとクジラの関係や捕鯨活動、捕鯨祭について紹介した。

第325回 2013年12月22日 急増する生涯独身者、そこから読み解く韓国現代事情

講師 太田心平

参加人数 31人

内容 韓国は儒教の影響が色濃い国。適齢期に結婚し、跡取りを残して、祭祀を途切れさせないことは、男性の義務とまでいわれていた。女性にとっても、嫁ぎ先の家族に尽くすことが、美しい生き方だった時代が続いていた。しかし、そんな韓国で、いま生涯独身者が急増している。その実情と背景をお話した。

第326回 2014年1月5日 女に寄り添う女たち——転回する「新しい社会運動」

講師 加賀谷真梨

参加人数 15人

内容 1990年に「女性のためのなんでも相談室」を立ち上げ、電話相談や一時保護を求める女性に親身に寄り添ってきた関東のある女性市民団体に着目した。1970年代後半に女性運動は陰りを見せたのに対し、

なぜこの団体は多くのボランティアの支えを得て、現在まで活動を継続しえているのか。その背景を活動内容の変遷とそれに従事する女性たちの語りに読み解いた。

第327回 2014年1月12日 産業化と手仕事

講師 森 明子

参加人数 50人

内 容 「産業化の時代は、機械の時代」と考えがちであるが、産業化をとげるために「手仕事」は大きな役割を果たした。産業化の時代は、手仕事の性格を変えていった時代であったともいえる。展示場のモノを見ながら、あらためて手の仕事について、考えてみた。

第328回 2014年1月19日 21世紀社会のエイジ・フレンドリー・コミュニティ

講師 鈴木七美

参加人数 23人

内 容 高齢社会に関する危機感を出発点として、全ての世代にとって住み心地の良い環境を構想するエイジ・フレンドリー・コミュニティの展開について報告した。スイス・ドイツにおける現地調査に基づき、住環境と文化資源の関係に迫った。

第329回 2014年1月26日 ウマと暮らす——カザフスタンの草原の村から

講師 藤本透子

参加人数 33人

内 容 カザフ人は、歴史的に遊牧民として活躍してきた。定住化した現在も、ウマは草原の日々の暮らしに欠かせない。慶弔時には、馬肉ソーセージや馬乳酒がふるまわれ、馬上競技や競馬も行われる。2014年の干支であるウマと、カザフ人のかかわりについて紹介した。

第330回 2014年2月2日 南米アンデス文明の神殿で発見されたジャガー人間石彫

講師 関 雄二

参加人数 39人

内 容 昨年、ペルー北高地パコパンパ神殿遺跡における考古学調査で、紀元前800年頃の石彫を発見し、内外で報道された。発見の経緯を紹介するとともに、その学術的意義を説明した。

第331回 2014年2月9日 〈驚異〉の文化史——アジャーイブとミラビリアってなに？

講師 山中由里子

参加人数 39人

内 容 珍しい不思議なもの・現象を説明し、可視化しようとする人類の欲求は、異なる文化圏において様々な「異形」として結晶を結んできたが、一神教や古代の知的財産を共有する西アジアとヨーロッパの想像世界は、意外と近いのである。キーワードは〈驚異〉である。

第332回 2014年2月16日 重宝されるタバと織物

講師 須藤健一

参加人数 33人

内 容 織機で布を織る技術とタバ（樹皮布）づくり術が伝えられているオセアニア。織物は東南アジアに近いミクロネシア、タバは織機をもたないポリネシアで女性がつくる。製作過程から貴重な交換・消費財としての価値を探った。

第333回 2014年2月23日 仮面が育む芸能——バリ島仮面舞踊劇トベンの世界

講師 吉田ゆか子

参加人数 48人

内 容 仮面舞踊劇トベンは、バリ島の宗教儀礼で上演される。台本もなく演出家もないこの演目では、仮面、演者、伴奏者、観客、神々が集い、相互に働きかけ、働きかけられる中で即興的に上演が編みだされる。仮面舞踏のデモンストレーションを行った後、特に、仮面が独特の仕方で、芸能の表現や伝

承に作用している様子をお話した。

第334回 2014年3月2日 韓国・ソウルの「お稽古」事情を探る！

講師 呉屋淳子

参加人数 39人

内容 一般的にソウルの子どもたちが通う習い事は、「数学」と「英語」そして「ピアノ」が代表的で、週4日は習い事に時間を費やす。思わず、ソウルの子どもたちは「忙しいの？」と思ってしまうが、実際の子どもたちはどう思っているのでしょうか？みんなつく「ソウルの子ども時間」から探った。

第335回 2014年3月9日 中国の風水と開発

講師 河合洋尚

参加人数 40人

内容 中国では、風水をめぐる信仰が色濃く残っている。人々は、風水に基づく理想の環境を追い求め、時には争い、時には開発に反対してきた。他方で、近年では風水を資源としたリゾート開発も始まっている。風水と開発をめぐる歴史や現在について紹介した。

第336回 2014年3月16日 連想がつなぐミュージアムの情報発信

講師 丸川雄三

参加人数 43人

内容 標本資料や作品を対象に研究を進めるミュージアムでは、モノから情報を引き出して他の情報とつなぐことが大きな意味を持つ。「文化遺産オンライン」などの連想情報サービスの紹介を通して、ミュージアムにおける新しい情報発信の可能性について語った。

第337回 2014年3月23日 民博25年、ミャンマー35年、そして、タイガース55年

講師 田村克己

参加人数 91人

内容 私が初めて足を踏み入れた1970年代の終わり、ビルマ（ミャンマー）は「軍事政権」のもと、対外的にはほぼ国を閉ざしていた。そうしたなかでの現地調査はどのようなものであったのか、そして、今に至る歴史を、本館との関わりや時代の背景を交えながら、ふりかえった。

第338回 2014年3月30日 映像メディアを用いた研究と博物館活動

講師 寺田吉孝

参加人数 22人

内容 本館では、映像メディアを使って文化を記録・保存するだけでなく、その一部を用いて一般来館者や研究者を対象とした民族誌映画を作っている。番組製作のプロセス（企画、事前調査、取材、編集、公開など）や、活用の課題についてお話した。

研究公演

「のど歌のふるさと」

2013年9月8日

解説 卷上公一（歌手）、小長谷有紀

出演 モンゲンオール・オンダール、オトクン・ドスタイ、ボロット・バイルシェフ、タンダライ、ほか2名

参加者 483名

内容 アルタイ山脈の周辺地域では「のど歌」という歌唱法がうたいつがれてきた。モンゴルではホーミー、トゥバではホーメイ、アルタイではカイ、ハカスではハイとよばれている。のど歌のもっともさかんなトゥバと、その隣のアルタイから国際的に活躍している歌手を招き、その真髓をお聴きいただいた。

「共振する大地のリズム——ブルキナファソ・カバコと佐渡・春日鬼組の競演」

2013年11月3日

解 説 仲野麻紀（音楽家）・吉田憲司

出 演 ムッサ・ヘマ、カバコ、佐渡 春日鬼組

参加者 468名

内 容 アフリカ、ブルキナファソのグワンの人びとの間に継承される葬送儀礼の楽士として育ったバラフォン奏者ムッサ・ヘマ率いるグループ「カバコ」と、佐渡「春日鬼組」の競演を通じて、大地と生活に密着して生み出される音の世界を体感した。

「雄勝法印神楽みんぱく公演」

2013年11月23日

解 説 小谷竜介（東北歴史博物館）、片山 毅（公益財団法人 美術院）、日高真吾

演 舞 雄勝法印神楽保存会

参加者 404名

内 容 2011年3月の東日本大震災は、東北地方の豊かな文化にも深刻な被害をもたらした。本館では、東北地方の有形、無形の文化遺産への支援活動を進めており、その活動の一端を日本の文化展示場の「東北地方のくらし」のなかで紹介している。この展示は、懸命な復興活動が進められている東北地方について、より関心をもっていただくことを目的としており、このたび、宮城県の雄勝法印神楽の公演を行った。三陸沿岸の伝統文化を代表する雄勝法印神楽をごらんいただき、再度、東日本大震災と東北地方へまなざしを向ける機会となった。

みんぱく映画会

2013年5月11日

文化とはなにか——マダガスカル我的生活文化、マダガスカルの音楽文化【特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連】

「ザフィマニスタイルのゆくえ」

担当講師 飯田 卓、川瀬 慈

参 加 者 122名

内 容 マダガスカル中央高地のザフィマニリのものづくりと、それを支える人々の暮らしを紹介した。同時に、ユネスコによる無形文化遺産登録や、ツーリズム等、ザフィマニリの社会にもたらされる外部からのインパクトに対して人々や社会がどのように折り合いをつけているかを示し、グローバリゼーションのなかで変容していく暮らしについて検討した。

2013年5月12日

みんぱくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「私の中のあなた」

担当講師 池田光穂（大阪大学）、鈴木 紀

参 加 者 323名

内 容 アメリカで話題を呼んだベストセラー小説の映画化。白血病の姉のドナーとして、遺伝子操作で誕生した瞬間から、度重なる施術に耐えてきた11歳の妹が、腎臓の提供まで求める両親に訴訟を起こす。とびきり姉と仲のよかった妹の突然の行動と、そこに秘められた切ない真相が、法廷や医療関係者も巻き込み、姉の生命を救うという目的で固く結束してきたはずの一家に、様々な波紋を投げかける。自身も心臓病の娘をもつニック・カサヴェテス監督は、仕事を辞めて治療にすべてを捧げてきた母親をねぎらいつつ、大好きな家族への罪悪感を笑顔に忍ばせる姉や、その間近で成長した妹と弟の複雑な心模様をも、繊細かつ温かなタッチで描き出す。理不尽な運命にもがき、立ち向かい、それぞれに再生していく家族の凜とした姿が胸に迫る、清々しい佳篇である。

この映画の主題は、医療技術の発達によって、親の望むように子供を誕生させたり、子供の臓器を利用してよいかという問いにある。上映後の解説では、医療人類学の立場から、その答えは医学の問題というよりも文化の問題であるため、私たち自身の判断が重要になるという指摘がなされた。

2013年 5月25日

文化とはなにか——マダガスカル我的生活文化、マダガスカル音楽文化【特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」関連】

「ギターマダガスカル」

担当講師 飯田 卓、亀井 岳（映画監督）

参加者 246名

内容 メロディックなギター演奏が特徴的なマダガスカルポピュラーミュージック。その背景には東南アジアから伝わった弦楽器や、独自の「死生観」が彼らの音楽と深く関わっている。本作では、国内外で活躍するギタリスト4名それぞれの故郷への旅を追い、生活に深く根ざしたマダガスカル音楽を紹介した。

2013年 6月16日

文化の記録と映像表現——川瀬 慈作品特集

担当講師 川瀬 慈

参加者 172名

「ラリベロッチ——終わりなき祝福を生きる」

内容 エチオピア高原北部を広範に移動するラリベロッチと呼ばれる吟遊詩人は、早朝に家の軒先で唄い、乞い、金や食物を受け取ると、その見返りとして人々に祝詞を与え、次の家へと去っていく。ラリベロッチは、唄うことを止めるとコマタ（アムハラ語でハンセン氏病の意）を患うという差別的な言説のもと、謎に満ちた集団として人々のあいだで語られてきた。本作は、ラリベロッチ老夫婦の路上での活動と聴衆とのやりとりを詳細に記録。

「Room 11, Ethiopia Hotel」

内容 ギンダール中心に位置するエチオピアホテル11号室の窓から下を見下ろすと、靴磨き、豆売り、荷物運び、洗車係等、ストリートは働く子供たちであふれている。本作は、ギンダールの路上で人々が繰り広げる細々としたドラマと、路上で生活を行う2人の少年シファロとヨハネス、そして撮影者である川瀬自身によるホテルの部屋でのやりとりから生起する物語に焦点をあてた。本作では、撮影者と被写体による“コミュニケーション、コラボレーションの証”としての映画的話法を提示した。

「精霊の馬」

内容 精霊の馬（アウォリヤ・ファラス）とは、エチオピアのザール憑依儀礼の霊媒を意味する。エチオピア北部の都市ギンダールは、古くからザール憑依儀礼が盛んであり、ミシェル・レリスの著書『幻のアフリカ』における記録がよく知られる。本作では、ザール霊媒マレム・ムハメッド氏と精霊セイフ・チャンガルの交流、交感を軸に、当儀礼に人々がもつめる世界を描く。

2013年 7月13日

みんなくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「さあ帰ろう、ペダルをこいで」

担当講師 マリア・ヨトヴァ（国立民族学博物館外来研究員）、川瀬 慈

参加者 321名

内容 1980年代の共産党政権下のブルガリアで、波打つ運命に引き裂かれたある家族の軌跡を、過去と現在を巧みに交錯させて描き、国内外で高い評価を受けた逸品。亡命先のドイツで事故に遭い、父母の生命とともに、それ以前の記憶も失くした青年の前に、7歳まで過ごしたブルガリアから駆けつけた祖父が現れる。四半世紀ぶりの再会にとまどうも、祖国目指してタンデム旅行を続けるうちに、両親や祖父母の愛に包まれた幼年期や、イタリアの難民キャンプで芽生えた淡い恋の想い出などが、断片的に甦る。バルカン諸国で盛んな、シンプルだが奥の深いゲーム“バックギャモン”が、離れかけていた祖父と孫との心をつなぎ、ひとりひとりの手に委ねられた人生の厳しさや素晴らしさの象徴として、映画的高揚感を生む。時代が移り変わっても、自らの信念を貫き通す祖父ゆえの、至言の数々を噛みしめたいくなる、滋味豊かなロードムービーである。

上映後、ブルガリア出身の講師が、冷戦後のブルガリアの社会状況について解説した。民主化・市場経済化にむけた急激な改革によって失業や貧困が深刻化し、国外への移民が急増していることがこの映画の背景にあり、そうしたブルガリア人移民の間にアイデンティティの問題が生じやすいことが

指摘された。

2013年9月15日

みんなくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「再会の食卓」

担当講師 野林厚志、小長谷有紀

参加者 324名

内容 1949年以降、長きにわたる中国と台湾との政治的な断絶により、波乱の道のりを歩むことになったある家族に光を当て、ベルリン国際映画祭で銀熊賞に輝いた佳篇。台湾へと逃れた国民党軍兵士の夫と生き別れ、身重のまま中国に取り残された妻は、心優しき新たな伴侶と子宝にも恵まれ、つましくも平穏な日々を過ごしていた。中台関係の緊張がようやく緩和される中、安否も分からぬままだった元夫との数十年ぶりの再会が、にわかに胸をざわめき立たせる。心づくしの料理で懸命にもてなす夫をはじめ、初対面の実父を前に無関心を決め込む長男や、ふたりの娘たちの複雑な心情が、静かに様子を見守る孫娘を介して、次第に露になっていく。実話に想を得た中国の気鋭・ワン・チュエンアン監督は、急激に発展を続ける上海を舞台に、悲痛な近現代史が奪い去っていったものと、それでも残る純粋な愛が、時に団欒の、時に修羅場と化す食卓でスリリングに絡み合う、余韻深い人間ドラマを完成させた。

上映後、映画の背景となる1949年以降の中国・台湾関係について解説があった。国民党軍の軍人は台湾に渡って榮民と呼ばれ一定の身分を保障されたが、1980年代以降の民主化の中では、彼らの地位は不安定となった。そうした歴史を学ぶことで、この映画に描かれた家族の境遇にひときわ感動を覚えた観客が多かった。

2013年9月28日

「白塔」

担当講師 蘇青（映画監督）、米娜（映画監督）、管野奈津美（筑波技術大学）、中津真美（東京大学）、小林昌之（アジア経済研究所）

参加者 155名

内容 前半は、ろう者コミュニティーの日常を描いた映画『白塔』を上映。映し出されるのは、中国でもっともろう者が多いといわれる河南省のろうの中年男性・景明。再婚を考える景明をとりまく手話でつむぎだされる人間関係、なんだか私たちの身近にあるような…あるいは、まったく異なる世界？実話にもとづくドキュメンタリー映画独特の雰囲気をお楽しみいただいた。

後半は、蘇青、米娜両監督をお迎えし、制作の背景やその後の展開などについて伺いながら、私たち自身のコミュニティーや世界観についても考えた。

2013年11月10日

みんなくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「人生、ブラボー！」

担当講師 松岡悦子（奈良女子大学）、小長谷有紀

参加者 270名

内容 ある日突然、533人もの子どもの父親である現実を突きつけられる男の葛藤や成長を鮮やかに描き、カナダ本国ならびに世界中で好評を博したフランス語映画。恋人から妊娠を告白された上に、かつて行った精子提供で誕生した子どもで結成された原告団に、父親の身元開示を求める訴訟を起こされる借金まみれの男が、素性を伏せて原告との面会を続けるうちに、名乗りをあげるか思い悩み、人生を見つめ直していく。父親が何者かすら知ることでもできず、サッカー選手、ストリートミュージシャン、重度の障害と闘う青年など、異なる境遇を懸命に生きる子どもたちに、人は好みが身勝手に暮らしてきた独身男が感化されていく様が、ユーモラスかつ繊細なタッチで綴られる。奇想天外な物語に、親や家族になることの難しさや喜びがチャーミングに散りばめられた、誰もが誰かの子どもで、多くの人とつながっていることに、改めて感謝したくなる佳篇だ。

現代社会においては、精子バンクや代理出産など、医療技術の進歩を背景にして出産をめぐる当事者が家族を越えるという現象が広がっている。リプロダクションに関する専門家を講師に迎えて、具

体的な数値を含めた解説が行われ、とてもわかりやすかったという感想が得られた。と同時に、従来の家族観を実態に合わせて変えていく必要性を認識する契機となった。

2014年 1月25日

みんなくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「ラビット・ホール」

担当講師 岩佐光広（高知大学）、鈴木 紀

参加者 380名

内 容 ピューリッツァー賞に輝く同名戯曲に感銘を受けたニコール・キッドマンが、自ら製作も兼ねて映画化を実現させ、賞レースを沸かせた注目の1本。花と緑に囲まれた住宅街で、愛犬と幸福に暮らすある家族だったが、4歳の一人息子の交通事故死が、生活を一変させてしまう。在りし日の息子の映像に涙しつつ、無理やり前に進もうとする夫と、事故から8か月を経ても、時に周囲を困惑させるほどに情緒不安定な妻は、いとおしい存在を亡くした喪失感とそれぞれに闘いながらも、深まる互いの溝を埋められずにいる。息子をはねた車を運転していた少年と再会した妻は、しまい込んできた胸中を語り合い、彼の漫画に登場する“パラレル・ワールド”を夢見るうちに、心に安らぎを覚える。大切な想い出とともに、決して消えない悲しみや痛みをも、ぎゅっと握られた手と手で受け止めていく夫婦の、これからに思いを馳せたくなる趣深い珠玉作だ。

この映画の主題は、身近な人の突然の死をどう受け入れるかという点にある。講師からは、そのために大切なのは、死者との関係だけでなく生き残った者たちの関係を紡ぎなおすことであるという指摘がなされた。死の悲しみは、ポケットの中の小石のように、消えることなくいつもそこにあるが、すこしずつ軽くなるという映画の中の台詞に感動を覚えた観客が多かった。

2014年 3月16日

みんなくワールドシネマ——映像に描かれる〈包摂と自律〉

「人生はビギナーズ」

担当講師 砂川秀樹（レインボーアライアンス沖縄）、宇田川妙子

参加者 448名

内 容 伴侶を看取り、75歳にして同性愛者だとカミングアウトした亡き実父との関係をモチーフに、多才なマイク・ミルズ監督が、感性豊かに映像化した人間ドラマ。ガンで旅立つまでの晩年を、自分らしく情熱的に生きた父との濃密な日々や、ありのままの夫への理解の陰に淋しさを秘めた母との、一風変わった少年期の記憶をたどりつつ、恋愛や人付き合いに消極的な一人息子が自身と対峙していく。彼と同じく孤独を好み、慎重に愛を育み合う女優の卵や、父の死後、頼れる相棒として大奮闘するテリア犬の支えを得て、喪失の袋小路を抜け、変化へと少しずつ踏み出す様が、独創的なトーンで綴られる。長いキャリアの中でも類を見ないユニークな役柄で、アカデミー賞をはじめ各賞を総なめにしたクリストファー・プラマーたちが、ナチュラルに快演する“ビギナーズ”が、身近で親密な存在のかげがえのなさを魅力的に体现し、明日への勇気をくれる名篇だ。

上映後、LGBTの活動組織の代表から、同性愛者をはじめとするLGBTの人たちの運動史や、日本における現状について解説があった。自分とは異なる性的指向にかんする映画や解説に対して、これまでの映画以上に違和感を覚える観客もいたようである。しかし、その違和感も重要な文化体験の1つであることは間違いない。

博学連携

●学習キット「みんなく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんなく」の貸し出しを実施している。「みんなく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2014年3月現在で13種類22パックを用意している。

名称	個数	2013年度貸し出し回数
極北を生きる	2	13
アンデスの玉手箱	2	24
ジャワ文化をまとう	1	8
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	16
ブータンの学校生活	1	8
ソウルスタイル	2	32
ソウルのこども時間	2	23
インドのサリーとクルター	2	21
ブリコラージュ	3	2
アラビアンナイトの世界	2	20
アイヌ文化にであう	1	16
アイヌ文化にであう 2	1	17
モンゴル	2	27

● **みんなく春と秋の遠足・校外学習 事前見学&ガイダンス春のガイダンス**

春のガイダンス 2013年4月2日、4日、5日

秋のガイダンス 2013年8月20日、8月22日、23日

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には36団体119名、秋には17団体38名、計53団体157名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

● **職場体験**

2013年10月29日～11月15日

学校教育および社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2013年度は5校14名の参加があった。

その他の事業

● **「ミュージアムぐるっとパス・関西2013」**

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

● **展示場クイズ「みんなQ」**

クイズ「みんなQ」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。本館展示の新構築に合わせ、2013年7月25日～8月27日に「みんなQ 日本の文化『祭りと芸能』『日々のくらし』編」を実施した。

● **「音楽の祭日2013 in みんなく」**

実施日：2013年6月30日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、本館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く本館を解放して開催することとなった。当日は20のグループや個人の演奏があった。

● **「みんなく×MBS ラジオ presents 行って！わかった！これがびっくりリアル世界だ。」**

実施日：2013年11月4日

テレビ番組の企画で世界を旅したMBSアナウンサーの河田直也氏と、世界各地をフィールドワークに出掛ける本館の池谷和信によるトークイベントを実施した。

●来館者1000万人達成

実施日：2013年9月20日

1977年の開館以来1000万人目の来館者を迎えた。記念式典では、1000万人目の来館者を、ナイジェリアのハウサ族の衣装をまとった須藤健一館長をはじめ、世界各地の民族衣装を着た職員が出迎えた。1000万人目の来館者には、1000万人目証明書、花束のほか、記念品を贈呈した。式典には、ボランティア・グループの「地球おはなし村」も駆けつけ、お祝いに迫力ある太鼓演奏を披露し、華やかな雰囲気に包まれた。

●モンゴル秋祭り（ナマリーンバヤル）

実施日：2013年10月26日

在大阪モンゴル国総領事館主催・本館共催で「モンゴル秋祭り（ナマリーンバヤル）」を本館にて開催し、モンゴルの文化と習慣や蒙日の交流活動等を紹介した。

●北大阪ミュージアムメッセ

実施日：2013年11月3日、11月4日

北大阪の7市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2013年度の受入実績は以下のとおりである。

受入期間：2014年2月13日～2月26日

受入人数：2名

●カムイノミ

実施日：2013年11月21日

カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、ウタリ協会（現 北海道アイヌ協会）の支部が順にカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、2013年度は苫小牧支部の協力を受けた。

ボランティア活動

「みんなくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年9月に発足した団体である。館内で視覚障がい者の展示場案内、休日、祝日等のイベント企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。

「地球おはなし村」は、2003年に本館で開催した特別展「西アフリカおはなし村」を契機とし、2005年10月に発足した団体である。館内でアフリカの音楽活動や昔話の語り活動等をおこなっており、近隣の児童センター、小学校および児童福祉施設などでも広く活動をおこなっている。

一般財団法人千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）

◎大阪：国立民族学博物館第5セミナー室

第418回 「マダガスカル中央高地のザフィマニリ文化」【特別展『マダガスカル 霧の森のくらし』関連】

2013年4月6日 講師 飯田 卓 参加者数 29名

第419回 「マケドニアの陶器と食文化」

2013年5月4日 講師 ゴルダン・ニコロフ（外国人客員研究員） 参加者数 39名

第420回 「金曜日はムジャッダラの日——アラビア語圏キリスト教徒のくらし」

2013年 6 月 1 日 講師 菅瀬晶子 参加者数 43名

第421回 「罨獵のイノベーション—— 動物との根比べ」【新日本の文化展示関連】

2013年 7 月 6 日 講師 野林厚志 参加者数 27名

第422回 「日本の森とミツバチと人」【新日本の文化展示関連】

2013年 8 月 3 日 講師 池谷和信 参加者数 37名

第423回 「カチーナ人形の作り手たち——40年後の『もの語り』の可能性」【みんなくコレクションを語る】

2013年 9 月 7 日 講師 伊藤敦規 参加者数 37名

第424回 「渋沢敬三の「民具」へのこだわり」

【特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」関連】

2013年10月 5 日 講師 小島摩文（鹿児島純心女子大学教授） 参加者数 40名

第425回 「くすりの民族学」

2013年11月 2 日 講師 小山修三（千里文化財団理事長／国立民族学博物館名誉教授） 参加者数 42名

第426回 「ドリアン王国探訪記」【フィールドワークを語る】

2013年12月 7 日 講師 信田敏宏 参加者数 32名

第427回 「中央アジアの民家の現在」【みんなくコレクションを語る】

2014年 1 月11日 講師 藤本透子 参加者数 32名

第428回 「神殿更新で社会が変わる——南米アンデス文明の誕生」

2014年 2 月 1 日 講師 関 雄二 参加者数 32名

第429回 「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる」

2014年 3 月 1 日 講師 小長谷有紀 参加者数 52名

◎東京：モンベル渋谷店 5F サロン

第106回 「トゥバ人たちの住むところ——21 世紀の『探検』談」

2013年 6 月30日 講師 小長谷有紀 参加者数 44名

◎東京：モンベル品川店 2F サロン

第107回 「婚礼に映しだされるインドのいま」

2013年12月21日 講師 三尾 稔 参加者数 24名

◎東京：国立新美術館研修室

第108回 「国立新美術館での『イメージの力』展にあたって」

2014年 3 月 9 日 講師 須藤健一 参加者数 46名

※終了後、国立新美術館研究員による展示解説を開催

●みんなく見学会（協力 国立民族学博物館）

第50回 特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」

2013年 4 月 6 日 講師 飯田 卓 参加者数 20名

第51回 特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」

2013年10月 5 日 講師 小島摩文（鹿児島純心女子大学教授） 参加者数 36名

●体験セミナー

第67回 「ニッポンの漆を考える——世界最古の漆発見の地・鳥浜貝塚と越前漆器」

2013年10月26日～27日（2日間・福井県） 講師 日高真吾 参加者数 17名

●民族学研修の旅

第82回 マダガスカル森と海を訪ねる——サザンクロス街道をゆく

2013年7月9日～20日（12日間・マダガスカル） 講師 飯田 卓 参加者数 11名

第83回 ベトナム西北部 少数民族の世界へ

2013年11月21日～29日（9日間・ベトナム） 講師 檜永真佐夫 参加者数 17名

●ワークショップ

親子で体験「泥ってすごい！おもしろい！——すまいと土を考える」

開催日：2013年10月12日～13日

主 催：一般財団法人千里文化財団

助 成：独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力：国立民族学博物館、左官を考える会、公益財団法人竹中大工道具館
土壁ぬり体験／ミニかまどを作ろう／光る泥だんご作り（のべ671人）
関連講座「世界の土壁の家、かまど」（104人）

●みんなくみ集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

実施日	実施場所	プログラム内容	参加人数
2013年5月14日	茨木市立沢池小学校	風呂敷	113名
2013年6月20日	豊中リタイアメントセンター	風呂敷	20名
2013年7月12日	向日市立第四向陽小学校	風呂敷	88名
2013年8月6日	京都府学び教室研修（京田辺）	風呂敷・ブーメラン	45名
2013年8月19日	大阪市内代小学校	風呂敷	30名
2013年10月3日	吹田市山二地区公民館	風呂敷	21名
2013年11月26日	京都府学び教室研修（綾部）	風呂敷	20名
2013年12月11日	伊丹市立定時制高等学校	風呂敷	25名
2013年12月14日	長岡京市内小学校	ブーメラン	30名

●万博公園賑わい創出支援事業の実施

スタンプラリー「万博・民博ものがたり」

会 期 2013年9月19日～12月3日（68日間）

会 場 万博記念公園内各施設（国立民族学博物館、EXPO'70 パビリオン、大阪日本民芸館ほか）

広報活動 JR 大阪駅

主 催 一般財団法人千里文化財団

助 成 独立行政法人日本万国博覧会記念機構

協 力 国立民族学博物館

参加人数 約30,000人

●『季刊民族学』（「国立民族学博物館友の会」機関誌）

協 力：国立民族学博物館

編集・発行：一般財団法人千里文化財団

144号：特集「機織りの現場から」（2013年4月25日発行）

145号：特集「水を考える」（2013年7月25日発行）

146号：特集「暮らしの節目と自然の節目」（2013年10月25日発行）

147号：主な記事「万国喫茶往来——メコンの流れとともに」（2014年1月25日発行）

- ① 国立新美術館「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」
図録（解説書）の編集協力
- ② 国立新美術館「イメージの力 国立民族学博物館コレクションにさぐる」
オリジナルグッズの製作・頒布
- ③ 国立民族学博物館オリジナルカレンダーの編集・発行および頒布
- ④ 来館1000万人達成記念Tシャツの製作・頒布
- ⑤ 特別展「屋根裏部屋の博物館」のオリジナルグッズの製作・頒布

